

水上瀧太郎 『大阪』 『大阪の宿』

—— サラリーマン小説誕生 ——

Takitaro Minakami's *Osaka and Osaka no Yado* :
Japanese Novels Featuring Corporate Employees

網倉勲

Isao AMIKURA

一 はじめに

水上瀧太郎（以下、瀧太郎と略記）の長編小説『大阪』は大正十一年七月十五日から同年十二月二日まで「大阪毎日新聞」に連載され、代表作の『大阪の宿』は大正十四年十月号『女性』（プラト社）に第一回が発表され同十五年六月号まで九回にわたり連載された。瀧太郎は勤務先（明治生命保険株式会社）の社命によって大正六年十一月から約二年間、大阪に転動した。この間に所謂「大阪もの」と言われる小説七篇（『大阪』『大阪の宿』を含む）を執筆しているが、これらの作品は第一次世界大戦の影響で活況を呈した大阪を舞台に、リアリズム手法で世態人情の様を活写したものである。

瀧太郎は四年間にわたる米英仏の留学を契機に、従来の抒情的な作風から現実的作風に移行したが七篇はその成果である。また、『大阪の宿』に先立つ大正十二年六月に執筆された評論「大人の眼と子供の眼」で「大人の眼」（物の本體を見極める眼「価値批判の眼」深く、鋭く、冷静に、世態人情の一切に透視線の及ぶ眼）の必要性を主張したが、これは現実主義への転換の宣言書と考えられる。「大人の眼」への転換宣言は『大阪の宿』に結実したと言つてよい。『大阪の宿』は主人公三田（月給取り、勤人）の眼を通して、第一次世界大戦の影響でめまぐるしく動く大阪の世態人情を余すところなく描いたものであつて、瀧太郎文学の本質ともいえるリアリズム文学の一つの到達点を示したものである。

注 本論稿では『水上瀧太郎全集』（全十二巻、昭和五十八年九月）昭和五十九年八月、岩波書店）を使用した。引用に際しては、例えば（①、八）として、引用した巻数と頁を表示した。但し、『大阪』『大阪の宿』を所収の第四巻については頁数のみとした。また、ルビは省略した。

『大阪の宿』は発表直後に様々な賛否評がなされた。代表的と思われるものの要点を掲載する。

【時事新報】

「批評と紹介」欄 大正十五年九月十九日

雑誌「女性」に連載されて評判の高かつた長篇小説で會社員であると共に小説家でもある主人公が大阪に於ける一年半の生活を簡潔な叙情味に富んだ筆致で描き現はしたもので高級藝術の氣品と通俗的興味が混醇してい、味ひを成してゐる。

「秋宵の讀後感」下田將美 大正十五年十月二十三日

(……) しかし此小説を讀んで私が最も感心する所は狭い周圍だけを書きながら廣い人間の生活の姿をはつきりと描き出してゐることである。(……) 其本當の姿は滅多には出ないが何かの機會に外に出てくる。三田公の送別の宴で總ての人が感じる

寂しさと涙と純情、それこそい、加減な日常の人間の生活の底にかくされてゐる尊い寶玉である。

【三田文學】(以下の諸批評は比較的長文であるので必要な個所を引用する)

『三田文學』第一卷第八號、大正十五年十一月號

「大阪の宿」を讀む」三宅周太郎

私はどう考へても此むつり者の人氣澤山が氣になるのである。腑に落ちないのである。又、さう氣をもむ位、そこにある感興を禁じ得ないのである。

で、私はよくよく考へた上、これは三田にとつかに「超人間」があるからではないかと思つた。(……)

彼の一番人間味と人間臭とを出した女事務員にさへ、彼は此のやうに人間味が尠い。此のやうに普通人以上である。(……) こんな男、これは一寸我々のまはりにゐないわけである。

(……) が、私は敢て一滴だけと云ふ。が、實に一滴だけ己が血の中に、三田以上の人間味の血を多く持ち、逆に、一滴だけ野呂大貫より野人の血を尠く持つ者、それは小説も書けないだらう。

小説にもならないだらう。(……) 矢張り此小説は社會批評的な見方が一番作中でのいいものと思ふ。いろ／＼大阪の宿の出來事に出合つて、三田の感慨をも

らして云ふ「世の中は廣くて深いなあ」は、私の舌の上に何度
のせて云ひ、味ひ^{アツ}してみた言葉だらう。

「大阪の宿」の裁判所にて」西脇順三郎

一體に本作者は評論的の仕事と小説の作品とに對して非常に
心理上の態度が極端に相違してゐるやうに思ふ。小説となると
變にマルミがつき、變んなところに興味を感じ、極めて平凡に
なる。自然派から受けた性質のよくない影響かも知れん。
(……) 客觀描寫によると如何に美しいものでも如何に崇高な
ものでも平凡に見えてしまふ。(……)

平凡通俗の感情とか事件に餘り目をつけ過ぎる様に思ふ。本
作品には人間の失望もあり希望もあり憂鬱もあるが此等の多く
は通俗的な表面的なものであつて、人間生存其自身から起つて
來たものではないやうに思はれます。(……)

構造からみると餘り平面すぎる。これも材料がよくない爲か
も知れん。一寸と立體的の構造にするには材料が薄弱すぎる。

「プロムナード」井汲清治

水上瀧太郎作る所の「大阪の宿」は、大都市大阪を描かうと
したのではない、偶然、大都市「大阪の宿」で、多少の縁で
集つた人々の物語を面白くして聞かせたものである。(……)
面白いといふ點から云へば近來稀に見るもので、手にとれば、

實際讀了するまでは文字通りに巻をおく能はざらしむるものだ
と斷言する勇氣は、私にも有る。(……)

主人公三田公を中心とする諸人物のアネクトオトを面白いと
思つたであろう。(……) 然るにアネクトオトに依つて示唆さ
れてゐる生活は、人物の外貌にすぎない。(……)

三田公の心的生活に作者は殆ど触れてゐないではないか。唯
對人的感情や情緒のみが斷片的に出てきて、三田公の性癖を記
述してゐるのにすぎない。

『三田文學』第一卷第九号、大正十五年十二月號

「水上瀧太郎氏の近業」久野豊彦

「大阪の宿」の面白さは氏の諧虐にあると云はねばなりませ
ん。(……) 三田公は、いつも消極的な自制的生活態度を持し
てゐながら、却つて、そこに諧謔の波紋を撒き散らかしてゐる。
(……)

彼は會社員として、衣食し、その傍、眞夜中まで執筆して年
末迄の生活費や小遣錢を考慮してゐるのです。だが、三田公は、
實はそれだけのことです。一向、自己の生活分裂に對しての何
等の苦悶もしてゐないのです。現に、三田は、畸形的經濟生活
を踏臺として、自己目的な文化生活を營んでゐるのです。

(……)
淫賣婦のおみつさんに對しても土佐堀は酔月のおつさんを通

してのお兼といふ投身未遂の女に對しても、義憤が燃えておま
す。けれども、依つて生ずる社會制度、そのものの缺陷に就て
は、甚だ無力と云つてよろしい。殆ど働きかけてゐない。
(……)

「大阪の宿」は大阪の人情地理です。

「隨筆的心境——「大阪の宿」を讀んで——」勝本清一郎

私は「大阪の宿」は繪巻物式の作品だと感じた。(……)

「大阪の宿」の構圖も、やはり多眼觀の上に立つたものと思
へられる。明かに觀點が移動してゐる爲である。そして主觀内
にも、全體を一つ主題で——一つ精神の凝集で、貫いて行く
單眼觀的意力は微弱である。(……)

さう云ふ部分的興味が多分に働いてゐる創作上の心境を、私
は隨筆的心境と名付ける。この隨筆的心境に低迷してゐるが故
に、「大阪の宿」が結局繪巻物式スタイルを採り、多眼觀的觀
照に終り、主題的迫力を缺くに至つたのだらうと考へたい。
(……)

所で「日曜」は、題材に於いて大阪物の嚆矢だつたばかりで
なく、作風に於いても劃期的な作品だつた。則ちこの作に於い
て水上氏は、従來の主情主義的な情緒味を捨て、全篇に渡つ
て、極力あからさまな客觀描寫を始められた。所がその客觀描
寫なるものは、實は相手を突ツ張して、多少意地悪く、皮肉に

見る事だつた。甚だ主觀的な客觀描寫だつた。(……)

極言すれば私は「大阪の宿」を小説とは呼びたくない。
(……)

最近文壇では、本格小説對心境小説と云ふ問題がやかまし
かつた。しかし本格小説とは筋のある小説で、心境小説とは身邊
雜記だと云ふだけの事の上に議論を立て、行くなら、要するに
題材論を出ない。又「彼」と「私」との議論で行くなら、多分
描寫の技法論に終わるであらう。同じ身邊雜事でも、人事關係
を根本力學でガツチリ掴んで行くか、接觸面を氣分や「批評」
で只見て行くかに依つて、本格的な小説とも、隨筆的な心境も
のとも、どつちにでもなる。(……)

トルストイの「アンナ・カレニナ」の立派な表現を——構
造力を、直接に指示して下すつたのも、實はやはり水上瀧太郎
氏だつた。

「大阪の宿」に対する批判は要約すれば主人公三田の人物像に関
わるものと、勝本の言う「主觀的な客觀描寫」によつて描かれた描
写方法に向けられたものである。三宅は主人公に「人間味や人間臭
から超然とした存在」「規則正しい生活は生活臭が無い」とし、久
野は「主人公はいつも消極的な自制的な生活態度」「苦悶もしていな
い」「社會制度、そのものの缺陷に就いては、甚だ無氣力」と指摘
している。勝本の指摘する「繪巻物」論とほぼ同じ内容であると考

えられるが、西脇は「人間生存其自身から起こつてきたものではない」とし、井汲は「現代資本主義の一角から眺めようとした物ではない」としている。更に久野は個人と国家の矛盾などにメスを入れなければ「氏の文明批評は遂に中途半端」になるとしている。

右の諸評論は『大阪の宿』の持つ「多眼観的」繪巻物式の作品の側面を的確に指摘したものと見えよう。日本近代文学が「自我」の在り方や「階級争闘」を問題としてゐるならば、勝本の「小説と呼ばびたくない」という表現も首肯出来ないわけではない。しかし、これ等の諸評論には主人公三田を論評するとき、三田が「勤人」月給取りであることに着目する視点が欠落しているのであって、前掲の諸評論が「勤人」の思想と行動を説明しなかつたことは遺憾である。所謂「大阪もの」の「日曜」「大空の下」「失職」には「勤人」が登場人物として描かれる（「正月」には「勤人」になつてしまつた三田）が登場する。現実派に転換した瀧太郎のテーマは「勤人」の世態人情、ライフ・スタイルをくまなく描くことであつたが、瀧太郎が「勤人」であつたことと関連付けて指摘したのは石坂洋次郎²であつた。

社員であつた水上さんに社員の生活を描いた作品が多いのは當然なことである。「勤人」はその中でも最も均整のとれたすぐれた作品ではないかと思ふ。そこには男女勤人のさまざまなタイプが温かい呼吸を通して見事に描出されてゐる。

る。「當世社員氣質」として後世に残るべきものであらう。

水上さんの所謂勤人小説に一貫した特質は、主として勤人の消極面の生活を取扱つてゐる事である。(……)

要するに水上さんは、會社の存在とか、社員の立場とかいふものに確乎とした積極的な信念を持つて居られたことには間違がない。

瀧太郎は終生「二重生活者」(作家とサラリーマンの「二足の草鞋を履く」こと)を自称し、かつ所謂「文壇」とは一歩を隔てた存在であつた。勤人(以下、サラリーマンと記述)を描く小説として見たとき、「規則正しい生活は、生活臭が無い」などの批判が相対化され、サラリーマン小説としての『大阪の宿』のもつ新しい文学的価値評価が可能になる。また、『大阪の宿』では随所に文明批判と共に文壇批判(惰性に陥つた自然主義、表面的人道主義、遊蕩文学批判)があるが、『大阪の宿』は当時の文壇へのプロテストの書とも言えるのである。

本論稿ではサラリーマンの思想と行動、ライフ・スタイルに焦点をあて、日本近代小説初の本格的サラリーマン小説が誕生したことを立証する。併せて『大阪の宿』を特色付けている「繪巻物式」描写によつてサラリーマン小説を書いた根拠を究明することとする。

また、主人公三田のサラリーマンとしての本質を明らかにするため『大阪』と『大阪の宿』を姉妹篇として扱う事とする(瀧太郎は

別々の作品としている。二作品の主要登場人物が共通していること、三田の大阪到着（『大阪』）から離阪（『大阪の宿』）で閉じること、『大阪』では下宿先を退所することで閉じ、『大阪の宿』では新しい下宿先から始まること、等を勘案すれば姉妹篇として扱う事は許されることと言えよう。

なお、瀧太郎は『大阪』『大阪の宿』に関して「あらはれる場面と人物には、珍しくも実景とモデルが多い」と述べているが、サラリーマン三田はサラリーマン阿部章蔵（瀧太郎の本名）をモデルにしていると考えられる。瀧太郎は大正五年十月に留学から帰国し、明治生命保険株式会社に入社、月給八十円のサラリーマンであった。翌六年十一月に副長として大阪支店に赴任したが、二つの作品は大正六・七・八年頃の大阪を舞台としたものと思われる。

二 サラリーマン小説誕生の背景

瀧太郎が大阪に赴任したのは大正六年十一月から同八年十月までであるが、この期間は第一次世界大戦終了の前後（第一次世界大戦は大正三年六月～同七年十一月）に当たるが、日本経済はここに「大戦景気」を迎えた。

企業利益率においては一〇〇%を越す業種が続出した。(……)

高利益⇨高配当と金融緩和という条件は、地方都市をも巻き込

んだ全国的な株式ブームをひきおこし、会社の新設や増資が盛況を呈するようになった。

（井上光貞他『日本歴史大系』^③五）

終戦直後は不況となるが、経済は大正四年後半以降一転して活況を取り戻し「熱狂的好景気」が到来する。

当初には戦争による通商の混乱によって下降した景気は、大正四年（一九一五）の後半以後に急速な上昇に転じた。これまでもヨーロッパの市場であったアジア・アフリカ・南アメリカ・オーストラリアなどへの商品輸出、ロシアをはじめとする軍需輸出、好況のアメリカへの輸出拡大などが、日本の未曾有の経済発展をささえた要因であった。(……) 元老井上薫が述べたように、日本資本主義にとって第一次世界大戦はまさに「大正新時代の天佑」であった。大戦景気の第一波は、海運業界に打ちよせた。ついで薬品・兵器製造・染料業界が活況を呈し、さらには紡績・織物にいたるあらゆる業界がうるおった。

（『大阪府の百年』^④）

なお、大正九年以降は「戦後恐慌」となるが、瀧太郎はこの変貌する大阪の経済を背景に青年サラリーマンの視点からこの作品を書いた。

大阪府は大正三年から同八年の間に、農業から工業への移行（なかも重化学工業の伸びが顕著）、資本の集中と蓄積など経済構造の転換が進んだのである。工業生産額は四・一倍增、工場数は一・四五倍増、職工数は十三万余が二十二万余と八万人以上も増加したのである。⁽⁵⁾ 工業の発展は都市の急膨張をもたらし、過密化と住宅不足、煤煙や廃液の急激な増加などの都市問題を引き起こした。一方で大戦による好景気に伴って諸物価は上昇し始めた。シベリア派兵の憶測から農家の売り惜しみや商社の買い占めもあって、米価は大正六年頃から上がり始めていた。

瀧太郎作品の上から見て付言しておきたい。第一次大戦をはさむ大正三年から大正八年の間の大阪市の人口増加率は二・二％であるが、人口密度は一平方キロについて二万一〇〇〇人という超過密状態であった。急速な都市膨張の結果、公害や交通運輸問題などの都市問題が顕在化するが中でも深刻であったのは住宅問題であった。大阪市の空屋率は大正八年に〇・一五と絶対な不足に陥った。さらに家賃の高騰（明治四十四年を一〇〇として大正十年は一九四）と敷金の増加が加わり労働者の犠牲は大きかった。このような状況の中で発生した米騒動は軍隊が出勤して鎮圧されたが、米騒動参加者は延べ二万三〇〇〇人、検拳者は総計三〇〇〇人を超え二人が軍隊に刺殺された。大阪での米騒動は大正七年八月九日を皮切りに各地で騒動が続いたが、軍隊の出勤もあって沈静化した。米騒動が示しているように、第一次大戦当時から物価の値上げが続き、それに

加えて増税が行われたので労働者の生活は困難になっていた。米騒動は米価高騰をきっかけとしたものであったが、民衆の行動の激しさは成金景気に沸く資産家とこれを支える国家権力に対する、民衆の反感の表れでもあった。また、第一次大戦の時期に注目すべきことに労働争議がある。賃金が物価上昇についてゆかず、賃上げ要求運動がおこりストライキが頻発するようになった。大正四年十二件であった労働争議件数は、大正五年二十件、同六年三十八件、同七年二十九件、同八年二八六件・参加人数六五七三九人に達した。この時期になると労働争議には労働組合が関与したり組合結成の契機になったりした（大正八年四月、友愛会関西労働同盟会設立）。

『大阪』の冒頭、主人公三田が下宿の窓から眺めて、「霧とも霧ともつかない十一月の夕空」(三) とかこつのは右のような大阪であったが、肝心なことは三田が東京からの転勤族として登場する事である。

ここで注目すべきことは第一次世界大戦の影響で、日本は産業構造の転換に伴い新たにサラリーマン層の拡大が見られたことである。明治政府の富国強兵・殖産興業政策によって会社、銀行、工場設立に進展がみられたが、これに伴い明治二十年代には、大学や高専の卒業生が民間の実業界に職を求める様になった。明治初期の「士族サラリーマン」に代わって「産業的ないし商業的サラリーマン」が躍進したのである（明治三十年前後は「士族サラリーマン」から「近代的サラリーマン」の過渡期⁽⁶⁾）。日清、日露戦争以後、企業活動

の活発化と大正七年の学制改革（私立大学の正式大学化など）もあつて「近代的サラリーマン」は増加し、明治四十一年には東京市の有業人口のうちサラリーマンの占める割合は五・六%から大正九年には二一・四%⁹⁾へ上昇する。第二次世界大戦前はサラリーマンと労務者・労働者とは区別されていたことは留意する必要がある。第一次世界大戦中の大正四・五年から戦争直後の同七年までは、「サラリーマン」としてのベル・エポック¹⁰⁾であり、「好景気はね返つて賃金が上がリ、官庁や銀行家から会社への転職が続出し、大学出が民間企業にどんどん就職する」という現象が生じた¹¹⁾。時間給でしかも長時間労働の職工と比較して、サラリーマンは月給制であり勤務時間は午前九時から午後四時、日曜・祭日は休み、退職金制度など恵まれた環境であつた。

これまで概観したように大正時代に社会の注目を集めるようになった存在ではあるが、「サラリーマン」の概念が多義にわたることから、サラリーマンとは何かを明確に定義付けることは困難だと¹²⁾言つてよい。梅澤正（注(8)）はサラリーマン存在のどこにポイント¹³⁾を置くかによつて次の分類が可能だとする。

- (1) 給与取得と経済生活の面にポイントをおく——俸給生活者、給料取り、月給生活者
- (2) 勤務先にポイントをおく——会社員、社員、会社人間、ビジネスマン

- (3) 所属性にポイントをおく——勤め人、勤務者、被雇用者（他人様に使われる身）
- (4) 社会階層の視点にポイントをおく——中産階級、ホワイトカラー
- (5) 仕事の性質にポイントをおく——会社ビジネスマン、専業会社員、企業内起業家

梅澤はこの分類を踏まえて、暫定的と断つたうえで「とりあえず公務員などは除いて企業に勤務する人」と定義している。確かに会社員と言つても従事する仕事の内容は多義にわたり、また役職も相違している。サラリーマンとは職業なのかと言う疑問さえ生じてくる。ここに大正時代の小説家が、第一次大戦後に台頭してきたサラリーマンの実態を把握できず、サラリーマンを主役にした、或いは主要な登場人物とした作品を構想する困難があつたものと思われ¹⁴⁾る。自然主義や白樺派の「自分はこんなに苦しんでいる」「悩んでいる自分¹⁵⁾が素敵でしよ」といった視点ではサラリーマンを描くことは出来ない。しかし、定義は一先ずおいてサラリーマン層の共通の価値観、思考・行動、ライフ・スタイルといったものは存在する。『大阪』『大阪の宿』の主人公三田の人物像はこの視点から説明することによつて、二つの作品がサラリーマン小説としての要件を満たしたものであることが理解できる。

『大阪』が出版された大正十二年とほぼ同時代の著作にはサラ

リーマンはどのように描かれたかを指摘しておきたい。

松下浩幸によれば大正十五年五月八日発行の吉田辰秋『サラリーマン論』(大阪屋號書店)は「サラリーマン」という語を用いて書かれた最初の本格的な書物であるとされる。この作品は「論」が示すように研究・評論であつて小説ではない。しかし、吉田はこの書に於いて、勃興する大正期のサラリーマンを的確に定義付け、その本質を明らかにしているので本論稿に必要な部分を要約しておきたい。

吉田によればサラリーマンは勤務の対価としてサラリーを受けるが、サラリーがサラリーマンたる要素であると述べる。さらに「其決定法則は、サラリーマンの生活費を根本基礎とする(……)サラリーは生計の保證といふべきである。而してサラリーは普通一ヶ月又は一ケ年を一期間として決せらるゝ爲に、生計も一ヶ月又は一ケ年の如き或相當期間の生計の保證」として、まず経済的存在としてサラリーマンを位置付ける。従つて俸給生活者、月給取、勤め人、知識階級、無産知識階級、中間階級、中産階級と呼称は様々にあるが訳語としては「勤務者」が適しているとしている。その上でサラリーマンを次のように定義する。

人格的覺醒をなしたるものにして、頭腦を主とせる勤務を供給し之に對して一身一家の生計と其身分地位に相應する費用を受け生活する者

資本家と労働者の対立が激化している時代に、吉田はサラリーマン層に両者を「調和」する役割を期待していた。雇用されることに於いてはサラリーマンも労働者も同じであるが、吉田はサラリーマンの特質を「頭腦を主とする努力」「理性の力」、労働者を「筋肉を主とする努力」「感情の力」として区分する。知識階級であるサラリーマンは労資の対立を「調和」することが「使命」であり、この「使命」に「覺醒」しなければならぬと考へた。注目すべきことは吉田が『サラリーマン論』を「サラリーマンの無氣力」の項から始めており、サラリーマンの無氣力は個人の問題でなく社会の仕組みからきていると指摘していることである。

サラリーマンは實は其スタートより、境遇そのものが或る癡醉に洗禮せられせられてゆく仕組みであり、憧憬も氣力もいつの時にか癡醉せられてゆくべき仕組みになつてをる。癡醉劑とは何ぞや、曰く俸給を原料とせる『恩惠』薬であり、曰く服務規律を原料とせる『献身の強要』薬である。

サラリーマンには失業に対する不安が重くのしかかっているので、俸給を原料とする恩惠薬(雇い主の考へで最低の給与に甘んじてしまふ)と、服務規律を原料とせる献身の強要薬(絶対服従)とは、「サラリーマン生活の總てに處方せられて、従順と忠實との勤務を

すべきように仕組まれ、これより無氣力を發酵せしめてゐる次第である。吉田はこのようなサラリーマンの問題にたいして「恩恵」を排除して、「サラリーマンの團結」を提起するのであるが具体的な言及はしていない。サラリーマンの團結と資本家と労働者との「調和」が本書の狙いであった。『大阪の宿』で主人公三田が内包していた矛盾の一部が、昭和三年に至つて表面化してきた事に注目しなければならない。

前田一著『サラリーマン物語』⁽¹⁵⁾（昭和三年三月、東洋經濟出版部）は「ベストセラーになると同時に「サラリ（一）マン」という言葉を一躍流行させ、日本独自の言葉として定着させることに大きな役割を果たした」と松下は言う。前田は同書「自序」においてサラリーマンやその予備軍が「腰辨生活の内幕を窺ひ、そこに織り出される悲喜劇の實感、豫測に苦笑せらるるところあらば、筆者望外の慶び」と著作の目的を述べる。前田は世間一般ではサラリーマンの生活は、気楽で金になる（午前九時から午後四時までの勤務時間、日曜・祭日は休み、月の終わりに給料がでる、賞与が出る）と羨ましく思われているかも知れないと言う。しかし勤め先に於いてその尊厳と誇りとを傷つけられるなど、「腰辨生活は正に一片の哀史そのもの」だと言う。前田はサラリーマンを次のように定義しているが、サラリーマン問題の中心は經濟と雇用であると捉えている。

サラリーマン、それは——俸給生活者、——勤め人——月給

取り——洋服細民——そして腰辨、——とその名稱が何であれ、正體を洗へば、『洋服』と『月給』と『生活』とが、常に走馬燈のやうに循環的因果關係をなして、兎にも角にも『中産階級』とかいふ大きなスコープの中に祭り込まれてゐる集團を指したものに違ひない。（自序）

「腰辨！」と謂つて、頭にピンと響いてくる社會通念といふものがあつて、何だか銘々に自分一人だけは解つたやうなつもりで居る。嚴格な意味に於ての客觀的標準を示すことは出来な
いまでも、とにかく腰辨といふ言葉の通り相場は銘々各自に首肯されるものと思ふ。（『腰辨のデフイニション』）

前田はサラリーマンを的確に定義することは出来ないが、「腰辨」としての通念はあると指摘している。『サラリーマン物語』の内容は、就職戦線の厳しさから始まつて、サラリーマンの収入・出世（月給袋、昇給、ボーナス、退職慰勞金）、衣食住（背広、省線電車、家計の遣り繰り、家賃）と多義にわたつてゐるが、時には統計数字を使用しながらユーモラスに物語る。注目すべき点は、就職について「大學さへ出たら、羽が生えて飛ぶといふ時代は遠の昔にすぎ去つた」としているが、就職難の原因について一、人物の下落（大にしては國家のためなりを考ふる腹の出来た人物がいらない）二、教育法の欠陥（社會で活動するだけの教育をしていない）三、民間・官庁

が採用を抑えている（企業の合理化など）ことを挙げている事である。ここで前田は就職難を社会の問題ではなく、就職希望の学生の資質に原因の多くを求めていることに留意する必要がある。

執務内容について腰弁たちは、事務所ではまるで「統計作成機械」又は「数字印刷機械」であり、少し良く見たところで「筆耕屋」の域を一步も出ていないとしている。また、蔭では会社方針を批判をするが（影辨慶）、「首」が怖くて正々堂々と主張出来ない腰弁の実態を明らかにしている。

前田は『サラリーマン物語』に引き続き『續サラリーマン物語』を出版（昭和三年十二月、東洋経済出版部）したが、著作の目的を「規則的な出勤と、道樂的な晝飯と、息抜きの出張と、そして宴会一夕の酔態と——總じてサラリーマンが、何をなし、何を食ひ、何を語り、何を欲して居るかに於いての片鱗を與ふるが爲に本書」を刊行したとする。サラリーマンの「享樂的側面」を取り上げているのだが随所にサラリーマンの教訓を布置している。前田はサラリーマンの成功に必要なことは「誠意」と「努力」と「健康」だとしているが特徴的な個所を列挙しておく。

(1) 本書は出勤時刻をめぐってサラリーマンの慌しい動きから始まっている。仕事ぶりは「牛の涎よろしく故意に引きのばしてゐるようにすら見受ける」。一人だけが能率をあげると、そのおおりで同僚が首になる恐れがある。日曜・祭日・年末年始の休暇の他に各社は「社員缺勤取扱ひに關する規定」によって病氣欠勤取扱ひがき

められている。サラリーマンにとって嬉しいのは日曜・祭日が連続することである。家族同伴で多摩川園、花月園にいたり、活動写真を観に出かける。

(2) 会社や役所には「分課規定と職制」によってサラリーマンの職務は細かく規定されており、また、月給高で等級の区別がされている。「出張命令」はサラリーマンの「息抜き」になる場合があるが、この出張費も「旅費定額表」によって職位別に規定されている。

(3) サラリーマンは「晝飯道樂」と「氣分轉換」のために丸ビル地下中央亭や花月、三越食堂を好むが、「晝食後の一時間休憩は、サラリーマンにとつて、解放された安樂境である」。午後の勤務時間ではタイピストの若い女性に眼が行くが、午後の職場は異性同志が心の衝動を興奮させる場でもある。女性たちの希求する唯一の途は結婚である。

(4) 就業後のサラリーマンは「勝ち誇つた常勝軍のやうに軽い得意の氣分につて」銀ブラに出かける。「女」と「酒」のカフェーへと繰り出すのである。カクテルグラスを傾けながら女給と交わす会話は三エス (Sport—Sex—Socialism) である。しかし、サラリーマンは安全志向であるべきで「滅茶、苦茶に酔興の自己満足する様な、馬鹿な真似はしない。料理代は少なくとも、チップは多く、男らしく而して上品に！」と自制をアドバイスする。サラリーマンの消費行動には常に女性への性的好奇心が付きまとうが、その結果花柳病に罹るケースがでる。この病氣にかからないうちは「男」に

ならないと言うが、前田は「斯んな経験をせなければ「男」になれぬといふなら、俺は男にならぬでも宜しい」と断言することは留意しておく必要がある。

(5) サラリーマンは宴会好きである。何かにかこつけて「飯を食はう」「一杯やらう」となる。自腹のこともあるが大抵は公用かお客の接待である。隠し芸などを披露しなければならない。

吉田と前田の作品でサラリーマンの生息やライフスタイルは浮き彫りになったが、ほぼ同時期に出た甲賀三郎『サラリーマン入門書』⁽⁶⁾(昭和四年、『サラリーマン』)は、職場内の人間関係にも焦点を当てた処世訓として興味深い。甲賀は「サラリーマンと云ふものは、職業そのものが消極的なものだから、すべて消極第一主義で行かなければならぬ」「命之従ふといふ風に、猫の如くに従順である事」と説き起こす。俸給の範囲内で遣り繰りすること、他人の昇給を気にしたり嫉妬したりせず自分の仕事だけを考えよ。馬鹿な上司でも良いところを見つけて奉ること。サラリーマンは公開の席で意見は述べず、上役の賛成する意見を述べること。大切な事は「二重人格者」になって仕事と個人生活をはっきり分けることである。以上が甲賀の説くサラリーマン成功の秘訣である。

吉田と前田・甲賀の著作によって時間的なずれはあるものの『大阪』『大阪の宿』に描き出されたサラリーマン三田像が浮かび上がってくる。サラリーマン三田の思想と行動を見る上で重要な示唆を与えるものと言えよう。

三 サラリーマンとしての主人公「三田」登場

『大阪』は社命によって大阪に赴任した主人公三田が、宿屋の三階から眺める大阪の街の描写から始まる。「戦争のおかげの好景氣」(四四)に活況を呈している大阪は「霧とも霧ともつかない十一月の空」のもと、視野にはいるのは「黒ずんだ停車場」、停車場から吐き出される「煤煙」、「賣薬の廣告塔」であった。好景氣のおかげで道修町(ビジネスセンターの中心街)に支店を持つ三田の会社の業績は躍進が期待されるが、反面ではその景氣が煤煙などの公害を深刻化するという矛盾を内包した街の光景であった。道修町に本社を置く武田・塩野義・田辺など薬品会社は第一次世界大戦のこの時期に基礎を固めたのだが、サラリーマン三田には大阪発展の象徴として「賣薬の廣告塔の強い電光」として脳裏に焼付いたのである。

三田の大阪に関する唯一の記憶は中学生のとき見た「博覽會」である。大阪で第五回内国勸業博覽會が開かれたのは明治三十六年三月一日から七月三十日までの五ヶ月間であった。明治政府が主催する内国博覽會の内最後のものであり最大規模のものであった。初めてイギリス・アメリカ・オーストラリア・カナダ・清国・朝鮮など海外から十八カ国が参加したが、期間中に博覽會で最多の四百三十五万余の入場者を記録した。三田が記憶するウォーターシュートは冷蔵庫、メリー・ゴードランド、アイスクリームなどとにも人気を集めた。この「博覽會」で注目すべきことは明治天皇を

迎えて四月二十日に開会式が行われたが、天皇は八回にわたって訪

問されたことである。これは砲兵工廠（明治二年）、造幣局（明治四年）の官工場設置で始まった大阪の近代化・殖産興業政策の成果を国民に知らしめるものであった。主人公三田が明治の殖産興業政策のシンボルとも言える「博覽會」を大阪での唯一の思い出として

いることは重要である。殖産興業の進展がサラリーマン階層を拡大したのであり、吉田が『サラリーマン論』で指摘した「恩恵」と「献身の強制」がシステムとして新しいサラリーマン階層を規制したのである。労働争議が頻発した当時の大阪でエリート・サラリーマンとして三田（欧羅巴留学の経験を持つ。八八）は「人格的覚醒」（労資対立を「調和」する役割）を迫られることを暗示する。

転勤族であることは山崎義光が指摘するように「中間的・外部的な立場」である事を示すが、加えてサラリーマン固有の安定・余裕（月収）の眼と不安（誠旨、失業）な眼を持つ観察者である事も留意されなければならない（主人公三田は『大阪』の末尾で退社を決意している）。

サラリーマン三田が起こした最初の行動は、安月給では一週間も滞在出来ない旅館から安い下宿屋を探すことであった。住宅難のため苦労したあげく高等御下宿城西館の日当たりの余りよくない八畳の部屋を借りる約束を取り交わした。城西館の同宿人のうち一人は東京に本社のある商社会社の社員であり、もう一人は貯蓄銀行の勧誘員であるが、下宿屋をサラリーマンが利用し、転勤族が日常の現

象となっていることを示している。

晝飯は一切抜く事にして、一箇月の宿泊料を割引して貰ひ、夜具蒲團自分持なら、その上に又割引くといふ事もきかされて、三田は明日を約して別れた。（三二）

下宿代が月三十円と聞くと、庶務係りの妹尾老人は「へえ、下宿屋でお晝飯ぬきで三十圓。驚きましたなあ」（三三）と驚嘆する。

三田の勤続年数と月給は不明（サラリーマン阿部章蔵（本名）の月給は八十円）であるが、銀行の初任給は大正七年四十円、大正十一年五十円であり、公務員は大正七年七十円であった。従って三田の収入はボーナスを考慮（二ヶ月から四ヶ月が普通）すると戦前の標準「百圓的サラリーマン」に近いと言えよう。下宿料金は文京区本郷の四畳半ないし六畳（三食付）で大正七年十五円、大正十五年で二十円から二十五円であった。吉田が示す「サラリーマン家計百分率表」によれば年収千五百円の家計では「食料費」四〇パーセント、「住宅費」は二〇パーセントである。これから推測して三田の選択はやむを得なかったと思われる。瀧太郎は大阪下宿時代を「浮名儲」（⑪）の中で次のように回顧している。

當時は歐洲戦争の眞最中で、物價は減茶々々にあがり、月給はあがらず、下宿代はまた、くひまに三十圓から五十圓になつた。

また、まれなくて轉宿する氣になつた位だ。その苦しい生活を救つてくれたのは「大阪毎日新聞」に連載した小説「日曜」次の日曜「大阪」のおかげである。(二二)

三田は自室で新聞小説を書く事に専念しているが、原稿料(戦争の御蔭で原稿料も良くなった)は生活費や小遣いの足しにしようとする。三田は「たつた五圓」(七三)のアップで日当り等、好条件の離れに移るが小説執筆のための環境が良くなれば部屋代のアップを納得する。『大阪の宿』では城西館から酔月に十円アップで移る(三三八)が、「その差は十圓以上に思はれた」と費用対効果を述べている。企業活動は費用対効果を重視するのであるが、サラリーマン三田はこの原則に従つて行動しているのである。

三田のサラリーマン的金融感覚は城西館の婆さん・亭主(贅六)との対決によって露わになる。贅六は諸物価高騰を理由として再三にわたつて部屋代の値上げを迫るが、婆さんは「どないしても儲けるのが商賣の道」「やかましい事云はん人は、うんとあげたらえ、やないか」(一五三)と嘯く。三田はあれこれ理屈は言うが最後には折れるお人よしと見られている。亭主は下宿人の食費を切り詰めたり、下宿人の不在時に断りも無く部屋を又貸ししたり、女中達の賃金を抑えたりして利益の増大に腐心(我利々々貪欲吝嗇)する。三田对贅六の下宿代を巡る攻防は、三田の近代的サラリーマンと前近代的な贅六との対立軸として『大阪』の主要テーマになっている。

三田は「正當の理由があれば爲方ありません」(二六一)と回答するが、「正當の理由」を値上げ承諾の根拠にしていることに注目しなければならない。

ここで主人公三田の金融感覚について検討を加えておきたい。月給、原稿料、下宿代、背広の仕立て代、靴の代金など作品のなかで三田が家計の遣り繰りに苦心している。月給の中で遣り繰りするのはサラリーマンの本性であつて、家計の収支を重視することは我利々々貪欲吝嗇とは無縁である。また、サラリーマンは金融の持つ機能・効用を重視し金融を蔑視することはしない。三田は「生まれつき金融の事を口にするのを非道く羞しがる性質だつた」(一六九)と金融に拘る事(贅六がこれにあたる)や拝金主義を退けている。また、長篇小説『世相』の報酬を予想外に多く受け取るが、「それ程の金を持つてゐるといふ自覺と、それを幾度も數へる自分の心の卑しさに、三田は人知れず赤面した」(二八五)。持ったことの無い大金を手にして「思ひ切り贅澤をして見たい」などと言う妄想を描く反面、それを自制する気持ちが働くのである。前田がカフェーの女給に対して「滅茶、苦茶に、酔興の自己満足をする様な、馬鹿な眞似はしない」と自制を働かせる気持ちに通底している。

贅六との金融感覚の違いは支払根拠の明確化の問題と、もう一つは契約遵守の問題を提起しているのである。値上げ交渉の中で三田は亭主の違約行為を問題にする。下宿代金の値上げを申し出た月の月始に遡つて適用しようとする事、一週間以上留守について割引

規定があるのに適用されていないことなどに立腹する（隣室の軍人は入室時の約束が守られていないことを理由に下宿を退散する）。企業の商行為は勿論、従業員の雇用にしても契約遵守が基本であり、契約当事者が一方的に違反すれば相手方は損害賠償を請求することとなる。サラリーマンとして三田はこの契約遵守の基本に則って行動している。

三田が大阪に赴任して四日五日経つうちに会社の仕事は段々軌道に乗ってきた（六二）。朝、向側の湯屋に出かけ、新聞を読みながら一膳御飯を済まし、手早く「洋服」に着替えて勤めの時間に遅れないように下宿を出る。道修町にあるオフィスの情景を次のように描写している。

会社の仕事は一層機械的だつた。歐羅巴の戦争のおかげで物價は素晴らしく暴騰したので、他では大概割増手當を出したが、役人上がりの頑固な社長は、何の思ひやりも無く、そのくせ人は金銭づくで使ふのは下々の下で、眞情を以て使はなければならぬと云ひながら、實際は無闇にやかましい命令ばかり下してきき使ふので、東京の方もさうだつたが、支店の者もおしなべて氣をくさらしてしまひ、たゞ徒らに慣習的に事務を取扱つてゐるばかりだつた。

日の暮には、先を争つて歸る社員にまじつて、三田もいそ／＼往來に出る。（七五）

サラリーマンとしての三田の行動は社内規定とサラリーマン心得によつて縛られている。就業規則によつて朝九時出勤を励行、分課規定と職制によつて「微細な分業」（『續サラリーマン物語』）に従事している。前田は「全體の仕事を一人で背負つて立つやうなことは、今日の分課規定と、職制とがそれを許さないやうに仕組まれて居る」と指摘している。三田は社員として社長方針を理解しており、同僚の反応も把握したうえで批判的な眼を向けているところは無産知識階級の面目躍如と言つたところである。知識層としてのサラリーマンは体制批判の眼で周囲を観察する。甲賀の説くサラリーマンの心得の通り、三田が公開の場で社長批判をする分けではなく影棄慶に過ぎない。無氣力に見える仕事ふりは入社以来、「恩恵」棄と「献身の強要」棄の麻酔に罹つてゐることに起因していると言えよう。自己完結を阻む「微細な分業」（自己疎外）と甲賀の掲げる「消極主義」はサラリーマンに大きなストレスを与える。前田が主張する「サラリーマン立身出世術」の要諦、「才人」でなく「大愚」（会社なり、銀行なり大にしては国家の為に仕事をする腹の出来た人物）を目指すことは、サラリーマンに新たなストレスを加えることになる。三田が大阪に着任したとき、眞つ先に下宿を心配して部下に手配を指示したのは支店長であつた。三田は着任早々に「恩恵」システムを再確認せざるを得なかつたのであるが、「恩恵」の影響は夜の接待にも及ぶ。退社時間直前に呼び止められて支店長の

学友であり会社社長を新地で接待するはめになる。相手側の野呂が社長の手前、上手に太鼓持ちの役を果たすのに生真面目な三田は苦痛を感じている。サラリーマン特有の社用接待もストレスの一因となる。

三田は四時の終業時間が来るといそぐと退社する。サラリーマンの特権と云うべき退社後のフリー時間と休日を、三田は小説の執筆（生活費の足しと自己回復）と消費の時間にあてている。一度、同僚に連れてゆかれた天神橋の「蛸安」で関東煮や牡蠣鍋で一杯やり、休日は下宿の女中達を連れて道頓堀で剣劇をおごり、親友田原と北新地で飲むなど三田の私生活は多彩である。三田は私生活に於いても、自分のことは自分でする習慣を身に着けているが、会社組織に適合出来るように訓育された賜物である。松下（前掲「解題」）は「サラリーマンの消費行動には常に女性への性的好奇心がつきまとう」「サラリーマン社会がその成り立ちから、飲食店や女性との性的接触を不可分の文化として抱え込んだ」と指摘している。職場には女事務員、タイピスト、電話交換手など若い女性が存在しており、前田の言う「性の誘惑」「性の悩み」が交錯する場でもある。しかし、安全志向のサラリーマンには職場での女性関係はご法度である。酔月の元女中おりかが三田の職場に金の無心のため訪れるが、応対中に支店長の呼び出しを受けて三田はどきんとする（六〇四）。監視の眼は張り巡らされているのだが、この網に掬い取られる話題は羨望の的として或いはスキヤンダルとして社内に広まる。三田の

書いた小説「世相」が新聞に連載されると執筆料を話題にされたり、芸者の蟒が宴席で支店長にコップ酒を浴びせた一件は、三田と支店長の蟒を巡る痴情のもつれだと噂された。

三田が外部に求めた女性は芸者の蟒と通勤途上ですれ違う若い女性えなみさんである。蟒はアウトローとして作品に登場するが、酔うと規則に従順な三田、酔興で威張る野呂、権力を持つ支店長にコップ酒を掛けてサラリーマン世界の秩序を否定する。三田は蟒と飲み友達として付き合うが自制心を失わず、安全第一の行動をとる。城西館、酔月の下宿では野呂を始め同宿人の乱れた性生活が語られている。その猥雑な環境の中で三田は決然とした態度を示す。

享樂主義の文學が全盛を極めた時代には、吉原や洲崎を知らないでは恥辱のやうに思ふ文學青年が多く、彼もしきりに誘はれたが、持つて生まれた人道主義と感傷主義が承知しないで、遂に足を踏入れた事が無い。（四六一）

文壇とは一歩離れて小説を書く三田（二重生活者）が、文壇の在り方を批判した一文である。「續サラリーマン物語」で花柳病になって一人前とする俗説を罵倒した前田の考えと同じである。後日、日本経営者団体連盟の専務理事となった前田は「才人」より「大愚」「腹の出来た人物」をサラリーマンに求めたのであるが、旧弊を打破して新しい無産知識階級の生き方を示したものと思われる。通勤

途上ですれ違うえなみさんは三田にとって聖女であり、令嬢や女学生とは違ったつましやかな姿を見染めて、結婚することを夢想するが、機械的で平々凡々の執務時間を離れた一つの事件であった。

友人田原との交流は三田に会社経営と労働争議という厄介な問題を持ち込むこととなる。田原が専務取締役を勤める車両会社は戦争の影響で業績は悪くはなかった。今期の余剰金を田原は、従業員の養老疾病年金制度の設立や職工への分配に当てたいと考えていたが、株主は配当金の増額（増配当も含めて）を求めて対立した。一方、職工達は物価騰貴を背景に賃金割増と西欧の事情に刺激されて八時間労働並びに夜業廃止を要求したうえ、要求が通らなければストライキに入ることを伝えた。労働時間の制限など職工の待遇改善を主張し株主と対立する田原を、三田は理想家肌と批判する。株主配当よりも経営の健全化を主張する田原に、三田は妥協案を示し「先づ儲けて後に志を行へばい、」（五四八）と忠告する。労働争議の背景には友愛会・大日本労働総同盟友愛会（大正八年）が掲げる労働組合の自由、最低賃金制度の確立、八時間労働および一週四十八時間制度、夜業禁止などの主張がある。また、大正八年十月二十九日開催の第一回国際労働会議（ILO）の動きもあった。株主配当に関する三田の考えは自分自身も雇われ人であるサラリーマンの立場としては矛盾している。当面の配当は株主と妥協して、まず儲けよという考えは職工達の犠牲の上でしか成り立たない。サラリーマンにとっても定期的な月給を別にすれば賞与や退職金への利益配分が

客観的基準によらず、資本家の恩恵や自由裁量に委ねられているのである。三田自身が物価高騰の煽りを受けて小説執筆料で月の賄を凌いでいることを考慮すると、財布は雇われ人、意識は資本家・経営者と言う矛盾したサラリーマンの立場を露呈している。この矛盾は労働者との関係でも指摘出来る。下宿代値上げを要請する下宿の亭主に三田は「今度も亦組合の決議とでもいふのですか」「組合つてものは有害無益なものですな」（一六一）と揶揄するが、下宿組合であつても結託して要求を突き付ける行為に警戒心を働かせていると理解出来る。また、引退した田原の職工達への演説や、田原専務万歳の声を三田は「不思議に寂しく聞いた」。このことはサラリーマンと労働者との立場の相違を示しており、一方で資本家の力の前に挫折する労働者を三田は傍観しているのである。吉田は資本家と労働者の間にたつて「調和」の役割をサラリーマンに期待したが、調和の役割を果たすことがサラリーマン自身の利益でもあることを実感（サラリーマンの解雇が現実となり、サラリーマンの団結が必要とされる環境）するまでにはまだ時間が必要であった。しかし、三田が「田原専務萬歳」の声を「絶え間なく岸を打つ浪の音よりも、萬歳の聲は長く耳の底に残つた」（五七二）としているのは重要である。当面は現状の枠を維持しなければならぬが、近い将来に労働運動のうねりは避けて通れないと認識する場面である。

小説家三田が遭遇した新聞記事捏造事件は、社会人としての三田の立場を考える上で重要である。捏造記事に対して憤る三田が、

「あ、いふ無責任を敢てする新聞を、たゞ無闇に怖がつて、勝手な眞似をさせて置くのは、此の社會を益々悪くする所以である。社會人の責任としても、飽迄も正しきことの爲に闘はなければならぬ」(二〇九)と自己の立場を明らかにする。サラリーマンとしては消極主義・無気力な三田が市民として闘う人に変身する。大戦を契機として台頭するエリート・サラリーマンは、社会人として「此の社會」の発展に責任感を求められ(博覧会の記憶)、一方、職場では影弁慶に徹すると言う「二重の生き方」を強いられた存在であった。理不尽な権力行使(捏造記事)に対する消極主義者三田が見せる強い反撃はエリート・サラリーマンの側面であるが、この時期の企業と個人、社会と個人の関係を窺い知ることが出来る。大正時代にサラリーマンが直面した矛盾を三田は「まずは儲けよ」と拡大主義で解決できると考えていたと思われるが、昭和期に入つてサラリーマンは吉田の言う「人格的覺醒」を迫られるのである。

三田は突然の人事異動を受けるが、転勤族の悲喜こもごもの思い出と共に「うす汚なく曇つた空の下に、無秩序に無反省に無道徳に活動し發展しつゝある大阪」(六四七)を後にする。

『大阪』『大阪の宿』が活き活きと描写されている秘訣は、瀧太郎が実生活をモデルとして主人公三田を始め主要登場人物や舞台を設定し、臨場感を高めたことにある(「浮名儲」①)、モデルの存在を認めている)。以下、実生活とモデルを対比しておきたい。

(1)主人公三田は瀧太郎本人。瀧太郎は山の手の住人(この当時は芝

白金)でヨーロッパ帰りであるが、三田も「麴町」(三六〇)出身で「歐羅巴から歸朝した」(八八)人物として設定されている。瀧太郎は大正六年十二月、明治生命保険株式会社の大阪支店副長(支店長に次ぐ職位)として着任した。三田の契約遵守の姿勢は、生命保険会社の基本が生命保険契約の履行にあることを反映している。

大阪支店は道修町四丁目七番地にあつて明治三十二年六月に社屋を新築したが、「大阪市内最初の煉瓦建築であつた。当時、メイנסトリートの心齋橋に面したため、見物人が絶えなかつた」と『明治生命百年史』(財団法人日本経営史研究所編、昭和五十六年七月九日、明治生命保険相互会社)は伝えるが、『大阪』の記述そのままである。(2)「お城のねき」にある城西館は高橋館⁽²⁾であり、向かいにある湯屋(六三、七四)は鼓湯である。瀧太郎は痔の手術で二か月程入院するが、贅六が部屋を又貸しする事件はこれに対応している。『大阪の宿』の酔月は大正七年十二月に転居した土佐堀の照月旅館である。

(3)専務田原は瀧太郎の学友梶原可吉であり、飲み友達の鱗(小早川静、芸者名お葉)は実在の芸者(毛利ふで⁽²⁾)でありその後東京烏森で「ふでや」を経営した。

(4)「役人上がりの社長は(……)」は父阿部泰蔵のことである。『明治生命百年史』には阿部泰蔵の健全経営について「生命保険をもつて単なる営利追求事業ではないとする考えは、かねてからの阿部頭取の強い信念であつた」としている。

日本近代文学においてサラリーマンを主人公とする小説は、例えば二葉亭四迷『浮雲』の内海文三は下級官吏、『其面影』の小野哲也は大学教師、夏目漱石『吾輩は猫である』の苦沙弥は教師、『野分』の白井道也は中学の英語教師など多数ある。しかし、作品の主人公が職業としてサラリーマンであつても、それだけでは「サラリーマン小説」とは言い難いのであつて、「正體を洗へば、『洋服』と『月給』と『生活』とが常に走馬燈のやうに循環的因果關係〔前田、前掲「自序」〕の中に主人公が取り込まれていることが肝心である。例えば金銭感覚をとつても、これまでの近代小説は金銭に触れないか、世俗への蔑視から金銭を軽蔑してきた。漱石の『永日小品』の「金」で空谷子に「金は魔物だね」と言わせているが、サラリーマンはこの魔物をどうコントロールするかを具体的に考える存在である。給料規定、勤務規則、分掌規定などによって主人公の日常行動が一挙手一投足まで枠にはめられているか、上司や同僚とのサラリーマン独特の「恩恵」と「嫉妬」の人間関係の中で呼吸しているか等、これまで詳述したサラリーマンの思想と行動、ライフ・スタイルの面から検討されなければならない。瀧太郎の二作品は従来「大阪もの」と分類され、大阪の世態人情を主に描いたものとされてきた。また、前掲の『大阪の宿』に関する諸評論は従来の文学視点（遠近法）に捉われており、サラリーマンの思想や行動を読みとる視点が欠落していた。第一次世界大戦を契機に勃興してきた新しいサラリーマン階層を、明確な概念として理解することは当時と

しては困難（定義すること自体が難しい）であり、小説のテーマとしては見逃されてきたと言えよう。また、諸評論の執筆者がサラリーマン経験を持たなかったこと（少なくとも瀧太郎の言う二重生活者ではない）が、三田への共感を喚起しにくいものとしたとも考えられる。表面的には平穩なサラリーマン生活にあつて、分業から生ずる自己疎外、資本家と労働者に挟まれたどっち付かずの存在、社会人と企業人との二面性などサラリーマンの存在そのものが困難な問題を提起しているのである。前田の『サラリーマン物語』がサラリーマン小説の走りだとすれば瀧太郎の二作品は日本初の本格的サラリーマン小説として位置付けることが可能である。

四 おわりに——サラリーマン小説としての「繪巻物式」描写

瀧太郎は、三田が新聞に連載した長篇小説「贅六」について「大阪といふ商業都市と、大阪人といふ金儲中心の特殊の性格に、多少皮肉な批評を浴せながら、表面は寫實的描寫を以て、都會の日常生活の幾場面を展開したもの」（四二八）と『大阪の宿』の中で大意を示している。瀧太郎自身『大阪の宿』について好評を博したと述べる反面、「私の小説が兎角三面記事的事實談のやうに解され易い事は否定出来ない」（『浮名儲』⑪、二二）と率直な感想も述べている。勝本の随想的心境、繪巻物、複眼的とする批判に対して、瀧太郎は「繪巻物式の小説だつて存在理由はある」「私は勝本氏の批評

を甘受した」「多情佛心」を評す」⑩、二五三」としているが、「存
 在理由はある」「甘受した」の部分に瀧太郎の本音が透いて見える
 と言えよう。勝本は海外留学によって「主として他人の——殊に外
 國人の——生活を眺める様になつた」ことを、「客観描寫」に移行
 した理由に挙げている。客観描写は「対象へ喰込んで行く事を、始
 めから拒否してゐる描寫法」とする。勝本の指摘する「單眼觀的」
 「遠近法」（一つの観点に焦点を結ぶもの）を採用した場合、サラ
 リーマンの或る部分を描くことになり、サラリーマン・ライフの本
 質や全体は描写できない。ここに瀧太郎が絵巻物式方法をとる必然
 性があったと考えられる。前田一の『サラリーマン物語』の描写方法
 は瀧太郎に類似したものであるのは同一の理由によるものである。
 山崎は絵巻物手法の効果について「局外の視座から複数の登場人物
 を多元的に焦点化する物語構造」と指摘している。

ここで瀧太郎の小説に関する言説を検討し、絵巻物式がサラリー
 マン小説にとって適切な描写方法であつたかどうか、また大正末期
 の文学状況に於ける意義を述べる。

瀧太郎は小島政二郎を論じた「緑の騎士」とその作者」（昭和二
 年十二月執筆、⑩）の中で新聞小説について「その日その日の面白
 さを主とする」「事件を追へば面白く」と述べているが、「大阪毎日
 新聞」連載の『大阪』はこの手法によつてゐる。また、主人公につ
 いて「作者が自分をモデルにした場合は、これを意識して滑稽化す
 るか、愚劣化するかしらない限りは、どうしてもいたはり過ぎたり、

気がさしたりして、描き足りない結果を招き易い」（二七〇）と述べ、
 描き方が中途半端になることを排除すべきことを指摘している。主
 人公三田が消極的、被虐的に見えるのはこの考えによつてゐるが、
 主人公を滑稽化・愚劣化することは主人公自体も観察の対象化する
 ものである。さらに同評論において、長篇小説の現状は日本近代文
 学がヨーロッパから移入されて以来、短篇では成果を挙げているが
 長篇ではヨーロッパの水準に達していないと分析する。長篇不振の
 理由を「廣大無邊の人生を背景とし、多數の人物と、錯綜したる事
 件を立體的に描寫する事は吾々の不得手とする所である」と述べ、
 「不得意の道」を乗り越えることに「浪漫的な希望をかけてゐる」
 （二六六）と言う。また同様の主旨を「廉賣」（大正十三年十二月執
 筆、⑨）では西洋作家に比して「社會を觀る眼、人生を批判する頭
 腦の働きの弱い事」を挙げている（六五七）。この論評は自作を含
 めてのものであるが、瀧太郎が『大阪』『大阪の宿』を構想すると
 き念頭にあつた認識と言えよう。「廣大無邊の人生」に対してサラ
 リーマンの日常生活、「多數の人物」に対して下宿・友人・職場の
 身辺の人々、「錯綜したる事件を立體的に」に対して日常体験を積
 み重ねると言う創作手法が浮かびあがってくる。サラリーマンの眼
 （大愚と消極主義を兼ね備えた眼）によつて周辺をしっかりと見るこ
 と、それによつて同時代の社會が浮かび上がってくる。サラリーマ
 ン小説では自然主義や白樺派作家のように悩む自分の描写が中心と
 はならない。「會社の仕事は一層機械的だつた」の記述で読者（特

にサラリーマン読者)は、歯車の一つでしかないサラリーマンの悲哀を了解するのである。エリートではあるが(エリートであるが故に)不安定なサラリーマンの現状は良く描出されており、勝本の「隨想的」という批評は適切ではない。

しかし、日常の生活体験の積み重ねでは描写内容が、個人体験の範疇に収まってしまう勝本が指摘するように立体的構成を欠く憾みがある。例えば労働争議に対してサラリーマン階層とは別の労働者階級の問題として捉えられているため表面的な描写に留まっている。大正期の最大事件の一つである「米騒動」に関する描写が欠落しているのも、サラリーマンから見ると「米価高騰」の影響は受けるものの、事件自体はサラリーマンが直接関与するものではないという認識に起因していると考えられる。(但し、米騒動関係の報道は禁止命令が出されていたことに留意する必要がある)。サラリーマン意識から発する自制的・消極的態度は随所に描かれている。三田は女中や芸者と対等な付き合いをしているが、金を盗んだおれん・おりか、また淫売のおみつに対して潔癖な三田は承認しがたい行為としながら結局は曖昧な態度をとっている。

『大阪』『大阪の宿』の描写方法を検討する上で大切なことは、この時期に執筆された評論「大人の眼と子供の眼」(⑨)の主旨とリアリズムに対する瀧太郎の信念である。日本の長編小説を刷新するために新たな挑戦を『大阪』『大阪の宿』で試みたと言える。

瀧太郎が主張する「大人の眼」とは「物の本體を見極める眼であ

る。価値批判の眼」「單に事物の分量に驚くのではなく、その質を吟味する眼」「實在を見る眼」「現實を見る眼」「深く、鋭く、冷静に、世態人情の一切に透視線の及ぶ眼」(四三九)のことを言う。日常の仕事は部分的(日常体験)であるが「大人の眼」で積み重ねた描写によってサラリーマンの生態が明らかになる。但し、主人公が物の本質を理解して、物事を批判的に見るとすれば主人公の行為には迷いが生ずる余地は殆どない。このために読者としては結論だけを提示されたように感じ、主人公の内面に入りこめない憾みがある。また、「大人の眼」で大阪の世態人情を描く態度は、価値判断の基準を知識階層・無産知識階級(資本家寄り)から見た「物の本體」を描写対象とすることになる。三田自身が嘆いた下宿代急騰の延長線上に米騒動や労働争議は起きているのであるが、資本家サイドからみれば困ったこととして事態を傍観する態度にならざるをえず、「世態人情の一切に透視線の及ぶ眼」は曇らされることになる。

一方、リアリズムについて「小説家小島政次郎氏」(大正十五年二月二日執筆、⑩)で次のような認識を示している。

多くの批評家、殊に文學の作品に新聞記事的概念を求むる批評家の言によれば、リアリズムの作風は行詰つたと云はれて居るが、わたくしはさうは思はない。未だ行詰まる迄行つてゐないと思ふ。殊に我國に於て然りといひ度い。(七一)

「大人の眼」で捉えた大阪の世態人情をリアリズム手法で描き出すことが瀧太郎のスタンスであるが、瀧太郎のリアリズムを永井荷風（以下、荷風）とトルストイとの関連で説明しておきたい（ただし、両者の模倣ではない）。

瀧太郎の創作第一号「山の手の子」は、荷風の推挙によって『三田文學』に掲載されたのであるが、このことが瀧太郎の文学的生涯を決定づけたのである。小泉信三によれば発売禁止になった『ふらんす物語』を密かに入手したが、瀧太郎はその多くの部分を筆写したというエピソードを紹介している。「永井荷風先生の印象」(⑨)、「永井荷風先生招待會」(⑩)では瀧太郎の荷風賛美と三田山上に巻き起こった荷風旋風の熱気が語られている。「永井荷風先生招待會」の中で小泉信三が私信で「隅田川」と「狐」は作者自身でい、と思つて居られるさうだ」(五五四)と伝えているが、瀧太郎は後日、「芝居の「すみだ川」(⑩)を執筆している。松村友視は「山の手の子」に於ける荷風の「狐」「すみだ川」の影響を指摘している。荷風熱は文章表現にも表れているのであって、久保田万太郎は「山の手の子」の冒頭の一節を引用して次のように述べる。

内容としての、回想的、追憶的感傷でも、表現としての、こ
とさらルビに助力させた漢字のつかひ方、あるひは、やうに
やうに、をかさねた飽くまで息のながい記述でも、以上の三
つの作の、書出しをみたゞけで、そのころのわれ、の仲間の

いかに無條件に永井先生に傾倒したか……といふことは、狐、
だの、深川の唄、だの、歡樂、だの、あめりか物語、以後
に於ける一聯の抒情的散文詩的な先生の諸作品に徹頭徹尾影響
されたかれらのすがた(……)。

初期の瀧太郎の小説には万太郎の言う荷風スタイルが確認出来るのである。本来、瀧太郎は独自の作風に固執した作家であり、作品の中に特定の作家の影響を見出すことは困難である。しかし、絵巻物式リアリズムを選択した背後に荷風の小説手法が念頭にあったと考えられる。荷風の小説手法は大正九年四月「小説作法」(『荷風全集』第十四卷、岩波書店)に三十九項目にわたって記述されている。本論稿で必要な箇所を引用すると次の通りである。

- 一 小説は独創を尚ぶものなれば他人の作を読みとそれより思ひつきたる事まづ避くるがよしおのれの経験より実地に感じたる事を小説にすべし(……)。
- 一 小説の価値は篇中人物の描写如何によりて定まる作者いかほど高遠な理想を抱きたりとして人物の描写拙ければ唯理論のみとなりて小説にならず人物の描写は筆先の仕事にあらず実地の観察と空想の力ありて始めてなざる、ものなり。
- 一 およそ小説の作風抒情を主とするもの叙事に重きを置くもの客観的なるもの主観的なるもの空想的なるもの写実主義的な

るもの千態万様一々説明しがたしと雖もその価値は唯作者の人格に在りといはゞ一言にして尽くべし。

一 小説は人物の描写叙事叙景何事も説明に傾かぬやう心掛くべし読む者をして知らずく編中の人物風景ありくと目に見るやうな思をなさしむる事これ小説の本領なり史伝は説明なり小説は描写なり。

一 説明七くどき時は肩が張り描写長たらしきは欠伸の種となるいづれも上手とはいひがたし(……)。

一 小説作法の中人物描写に次いで苦心すべきは叙景なり(対話は人物描写の一端と見るが故にこゝに言はず)小説中の叙景は常に人物と密接の關係を保たしむべし其の巧みなるものは却つて直接に人物の説明をなすよりも効能なることあり(……)。
一 (……) 一 人物を描かんとするやまづ其の人物の活動すべき場面の中街路田園等写生し得べき処は一応写生して置くがよし(……)。

荷風は『溷東綺譚』(昭和十二年)に於いて「小説をつくる時、わたしの最も興を催すのは、作中人物の生活及び事件が開展する場所の選択と、その描写」「背景の描写を精細にするには季節と天候にも注意しなければならぬ」と記述しているの、荷風の小説手法は一貫したものと見てよいと思われる。瀧太郎の初期のものを除けば、荷風の影響の痕跡は見当たらないが、「おのれの経験より

実地に感じた事」「人物の描写」とそれに次ぐ「叙景」重視、長たらしい描写をしない事、「唯作者の人格に在り」「街路田園等写生」

等は瀧太郎の小説手法と通底したものと見えよう。叙景について言すれば『大阪』の冒頭、『大阪の宿』の冒頭ではほつとした主人公の安堵感と置かれた状況が表れている。また、会社の通勤途上で「二階建ての二軒長屋」の情景で「此の新しいものの好きでは今正に東京を凌駕して亞米利加に追隨しよう」と云ふ大阪に、不思議にも多く残つてゐる景色である。近松や西鶴の描いた時代から、今日迄立腐れつ、焼残つたものであらう。」(四五四)と描写するが時代の變遷を的確に捉えている。佐藤春夫は荷風文学の本質を「その温雅にほどのいい詠歎と、高邁な文明批判と、透徹した現実鑑賞」としている。さらに「踊子」では「写実風の単純化」がなされており、「この作が相当緊密な筋を持つてゐながら立体的でなく平板なものこの単純化に伴ふ結果であつて、亦、日本の小説らしい姿と云ふべきである」と論評している。

一方、瀧太郎はロンドン滞在中にトルストイ文学の魅力に開眼したが、当時の状況を小泉は「トルストイをもつて第一の作家とすることは、おそらく終生渝らなかつたと思う。彼はよくトルストイのリアリズムいうことを言った」(『外遊時代の水上瀧太郎』『小泉信三全集』⑫)と書き留めている。瀧太郎は小説「倫敦の宿」(⑥)の小節「トルストイ」でトルストイへの傾倒ぶりを述べている。瀧太郎が日本の長篇小説について「廣大無邊の人生を背景とし、多數

の人物と、錯綜したる事件を立體的に描寫する事は吾々の不得手とするところ」とするのは、トルストイの『戦争と平和』『アンナカレーニナ』を念頭に置いた発言と思われる。「浮名儲」(⑩)の中で『大阪』で新聞記事を捏造した記者を「破れし靴下」と表現したことの経緯を説明している。

何故破れ靴下など、いふあくどい描寫をしたかといふと、それによつて人間を明瞭ならしめる爲の手段と考へたからだ。當時私はトルストイの小説を耽讀し、彼が或る人間を描く場合に、何かの癖をつけ加へて姿をはつきりさせる常套手段を學んだ。

(二〇)

「破れし靴下」式の表現は二つの作品を通してしばしば活用されている。

先進ヨーロッパの「立體的描寫」のレベルに達していない段階で、日本的長篇小説を構想するにあたり、荷風のな小説手法(結果的に両者の小説手法は共通性を持った)とトルストイ的リアリズムを念頭に徹底したリアリズムに打開策を求めたと考えられる。転勤族サラリーマンの「大人の眼」によつて主人公を含めて客体化しつつ、大阪の世態人情の中で生きるサラリーマンライフを描き出したのである。瀧太郎が絵巻式リアリズムに徹した理由は、当時の文壇に対する瀧太郎の批判でもあることは見逃せない。関東大震災に関する

評論「所感」(⑨)で次のように述べるが、これは大正文壇に対して持つ日頃からの不満の表明でもある。

年が年中呼吸切れのした驅足で、西洋近代化のあらゆる思想を、何の疑ひもなく選擇も無く受入れ、更に新しく輸入され、ば、前のものは弊履の如く捨て、振向きもしない。(……) 寫實主義、自然主義、享樂主義、人道主義、未來派、表現派、さては歐羅巴の珈琲店に生まれたやうな出まかせのダダイズムや渦巻派、又プロレタリアの藝術に至る迄、かへりみて餘りに浮足だつたことを恥なければならぬ。(……) 久しく輕んじられた自身自身の練磨と、反省と、鞭撻とを以て、今度こそは顧みて恥ぢない道を歩むべきである。(四七二・四七三)

先に三宅・久野は「苦悶しない」主人公を批判し、井汲は心的な生活に殆ど触れていないことを指摘したが、悩む姿やあからさまな心理描写の不十分さ、写実風の単純化が三田の存在を觀察者の位置に留めてしまったのかもしれない。しかし、これは意図的に日本的長篇小説を試みるために選択した手法であつた。

當今流行の新技巧派などと呼ばれて居る作家等が、無駄に冗長なる心理解剖の遊戯に有頂天になつて、落語家でも、幫間でも、田舎藝者でも、不良少年でも、殿様でも、何れも小説家のやう

にもつともらしく、理窟っぽい心理的開展を示して、くだくだしくこだはらせなくては承知しない馬鹿々々しい素人脅し(……)

〔「末枯」の作者〕⑨、一六一

近頃流行るやうな、昔の英雄、美人、高僧、盗賊等の逸話に、無理に近代的問題をつけ加へた小説のやうなのは、あれは心理解剖の遊戯で、お話の部に属す可きものだ。

〔泉鏡花先生と里見弴さん〕⑨、一八八

自然主義、白樺派、理知主義の流派の並立や、宗教文学、大衆文学などの新しいジャンルの盛行があり豊穣と言われる大正文学であつたが、瀧太郎は「二重生活者」として文壇と常に距離をおき独自のリアリズムに徹した『大阪』『大阪の宿』を作り出した²⁸。人道主義の感傷を排し、大袈裟或いは過剰な心理描写をさけてサラリーマンの視点から新興のサラリーマン階層の生態を捉えた。サラリーマン個人と組織、株主と経営者・労働者との関係を取り上げたことも先駆的な意味を持つものと思われる。

(注)

(1) 『大阪』は大正十一年十一月十九日、『大阪の宿』は大正十四年十月三日の稿了である。なお、本文異同等は第四巻の和木清三郎「後記」に詳しい記述がある。

(2) 石坂洋次郎「水上全集第五巻を讀みて」昭和十六年一月、(水上瀧太郎全集月報)第三号第五巻、昭和五十八年十一月、岩波書店

(3) 井上光貞他三名編『日本歴史大系 五 近代Ⅱ』平成元年八月二十八日、山川出版社

(4) 小山仁示・芝村篤樹『大阪府の百年』平成三年十月十五日、山川出版社

(5) この項の工業生産高・工場数・職工数は『大阪府の百年』(前掲)「第一次世界大戦と大阪」参照

なお、『日本歴史大系』(前掲)によれば、それまで停滞していた米価も大正五年末から上昇に転じ、物価平均は大正七年に戦前の二倍を超え、大正九年初めには三倍を超す急騰ぶりを示した。

(6) 住宅問題・米騒動については芝村篤樹『日本近代都市の成立——一九二〇・三〇年代の大阪』(平成十年十二月二十二日、松籟社)参照

(7) 労働争議については新修大阪府史編纂委員会『新修 大阪府史 第六巻』(平成六年十二月一日)参照

(8) 梅澤正『サラリーマンの自画像』平成九年三月二十五日、ミネルヴァ書房

(9) 石川弘義他九名編集『大衆文化事典』平成三年二月二十五日、弘文堂

(10) 松成義衛他三名「日本のサラリーマン」昭和三十三年三月十五日、青木書店

(11) 梅澤正(前掲)

(12) 鈴木貴宇は「研究動向 サラリーマン」(昭和文学会「昭和文学研究」第六十一集)でサラリーマンの研究はほぼ「日本モダニズム」の研究と近似すると指摘している。

(13) 井上ひさし・小森陽一編著『座談会 昭和文学史 第一巻』平成十六年六月二十日、集英社

(14) 吉田辰秋「サラリーマン論」大正十五年五月八日、大阪屋號書店

なお、同書は和田博文監修「コレクション・モダン都市文化」第三十三巻(松下浩幸編集「サラリーマン」)平成二十年一月二十五日、ゆまに書房、所収を使用した。また、同書の松下浩幸「エッセイ」「解題」(関連年表・参考文献)を参考にした。

「解題」によれば吉田は明治二十五年生まれ(瀧太郎より五歳下)で名古屋商業卒業後、満州に於いて十五年間のサラリーマン生活を送った。勤務先を諸事情によって退職せざるを得なかったのであるが、その経歴をもとに「サラリーマン論」を執筆した。瀧太郎の「二重生活者」に属する人物と言えよう。

(15) 前田一「サラリーマン物語」昭和三年三月二十日、東洋経済出版部
『續サラリーマン物語』昭和三年十二月二日、東洋経済出版部

なお、『續サラリーマン物語』は松下浩幸編集「サラリーマン」(前掲)にも収録あり。松下の「解題」によれば前田一は明治二十八年生まれ(瀧太郎は明治二十年)で日本の満鉄といわれた北海道炭礦汽船に入社。昭和四年には労働問題研究のためヨーロッパに留学、昭和二十一年には取締役就任。昭和二十三年には日本経営者団体連盟の専務理事に就任した。瀧太郎とはほぼ同時代をサラリーマンとして過ごし、小説を執筆した経歴は瀧太郎の「二重生活者」と一脈通じるものがある。前田の「サラリーマン物語」はベストセラーであった。

(16) 甲賀三郎「サラリーマン入門書 現実的な餘りに現実的な——」昭和四年三月、雑誌『サラリーマン』掲載。本稿では松下「サラリーマン」(前掲)所収のものを使用した。

(17) 「第五回内国勸業博覧会」については大阪府史編纂所「大阪市の歴史」(平成十一年四月二十日、創元社)、原武史「民都」大阪対「帝都」東京(平成十年六月十日、講談社)参照

(18) 山崎義光「月給取りの視点から見た大阪——水上瀧太郎『日曜』『大阪』『大阪の宿』(黒田大河他五名『横光利一と関西文化圏』平成二十年十二月三十日、松籟社)。なお、山崎は「大阪の宿」と夏目漱石『坊ちゃん』との類似から瀧太郎の小説手法を「写生」の手法にあるとする。日本近代文学に於いてリアリズムが写生(高浜虚子)から発展したことは江藤淳『リアリズムの源流』(平成元年四月二十日、河出書房新社)で指摘されたところであるが、瀧太郎と漱石の関係を指摘する根拠は見当たらない。

(19) 週刊朝日編「値段史年表 明治・大正・昭和」昭和六十三年七月三十日、朝日新聞社

(20) 岩瀬彰『月給百円』サラリーマン—戦前日本の「平和」な生活』講談社現代新書、平成十八年九月二十日、講談社

(21) 「高橋館」(昭月旅館)の地理については平松幹夫「大阪の遺跡」(水上瀧太郎全集月報)第八号第三巻、昭和五十九年四月、岩波書店)に詳しい。また、大谷晃一「解説『大阪の宿』の風景」(『大阪の宿』講談社文芸文庫、平成十五年八月十日)には地理案内とともに、田原こと梶原可吉は蓄電池製造の神戸電機(作品では車両会社)勤務であり、最後は大丸の人事部長であったことを紹介している。

(22) 「小山内先生終焉の夜」(10)の冒頭に「大阪北の新地の名妓おかよ事毛利おふでさんが東京に進出して、新橋驛裏烏森に、ふでやといふ宿屋を開業し

た」(四一五)とある。

(23) 小泉信三「読書の記憶」『小泉信三全集』第十四巻、昭和四十二年四月十日、文藝春秋。小泉の瀧太郎に関する評論については、青山学院大学院日文学院生の会『緑岡詞林』第三十五号の拙稿「水上瀧太郎を読むための文献一覽」を参照されたい。

(24) 松村友規「水上滝太郎『山の手の子』の風景」、中村三代司・松村友規・吉田榮治編著『三田文学の系譜』昭和六十三年十二月七日、三弥井書店

(25) 久保田万太郎「よしや わざくれ 仲間(2)」『久保田万太郎全集』第十二巻、昭和五十一年一月十日、中央公論社。なお、久保田の瀧太郎に関する評論は『緑岡詞林』(前掲)の拙稿を参照されたい。

(26) 佐藤春夫「最近の永井荷風」『定本 佐藤春夫全集』第二十三巻、平成十一年十一月十日、臨川書店

(27) 瀧太郎は「大阪」の中で安易な人道主義文学や宗教文学を非難している。「しかも當時流行の人道主義的感傷癖を多分に含むものである。至る所に出て来る人類の救済といふやうな文字が、まるつきり無内容に用ひられてゐるのが堪らなかつた」(二〇四)、「一體私は、耶穌だとか親鸞だとかいふ偉い人を喰物にするのは嫌いです」(八五)と主人公三田は論断しているが、倉田百三「出家とその弟子」(大正五年)や賀川豊彦「死線を越えて」(大正九年)などがベストセラーになったことが背景にある。「大人の眼と子供の眼」では、「死線を越えて」は「蕪雜冗長術氣雅氣滿々」で「失笑を禁じ得ざるもの」(⑨、四四〇・四四一)であり雑誌社が作り出した人気だとしている。賀川に対する評価の適否はともかくとして、瀧太郎が文壇に流布する皮相的な思想や描写を避けようとする姿勢は理解出来る。

(28) 吉田精一「明治大正文学史」(吉田精一著作集 第二十巻、昭和六十一年六月十日、桜楓社)「大正文学史序説」によれば、大正文学の主流は自然主義・理想主義・耽美主義の世界観や人生観にとらわれず各自の独自性をはつき

りと出す事だとする。第一次欧州大戦の終わるころから社会の様相は深刻な動揺を呈し、従来の個人主義思想では処理することが不可能となり、労働文学・社会文学と新感覚派につながる運動となる。

「大阪」『大阪の宿』の大正文学に於ける独自性の背景はこのようなものであった。